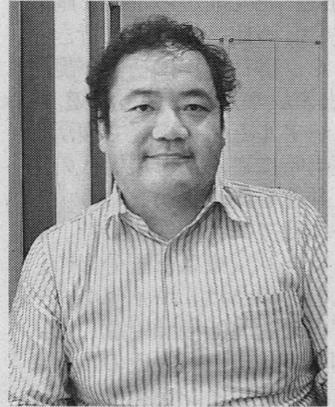


慶応義塾大学環境情報学部の増井俊之教授は、情報機器と人間をつなぐ「ユーザーインターフェース」の研究で日本有数の存在だ。国内の携帯電話の日本語入力方式としてほぼ標準的に

才の横顔

慶応義塾大学
環境情報学部教授
増井 俊之氏



ますい・としゆき 82年東大工卒。84年同修士課程修了。富士通入社。シャープ、米カーネギーメロン大学、ソニーの情報技術系研究所や産業技術総合研究所を経て、06年に米アップル入社。08年に慶大SFC研究所上席研究員。09年から現職。52歳。

携帯に予測変換導入

使われている「予測変換」を最初に開発したほか、米アップルのスマートフォン（高性能携帯電話）「iPhone（アイフォン）」の日本語機能にも関わった。今も利用者の視点に立

ったスマホの進化に興味は尽きない。「かな漢字変換みたいな複雑なプログラムは無駄だと思っんですよ」。増井氏はそう言いながら愛用のマックのノートパソコンを開き、自ら開発した「Gyaim」と呼ぶ日本語入力プログラムを実演して見せた。

「Gyaim」のプログラムがある。

「より良い方法がないだろつかと常識を疑う」。これが研究者としての発想の基本にある。増井氏の業績の中で最も著名な日本語入力プログラム「POBox」。「フリック入力」とは、キーを表示し、指をほじくように動かして文字を入力する方式。今やiPhone以外のスマホでも日本語入力方式として採用されている。

「より良い方法がないだろつかと常識を疑う」。これが研究者としての発想の基本にある。増井氏の業績の中で最も著名な日本語入力プログラム「POBox」。「フリック入力」とは、キーを表示し、指をほじくように動かして文字を入力する方式。今やiPhone以外のスマホでも日本語入力方式として採用されている。

入力プログラムの先駆けだ。従来よりも少ないキー操作で入力ができることから、予測変換方式は携帯電話機の日本語入力方式の主流になった。こうした功績が認められ、06年には米アップルから声が掛かり、i

斬新にスマホの未来開く

だが、当の増井氏はフリック入力に否定的だ。従来力の近く、新規性に乏しいうえ、欠陥も目立つと評する。タッチスクリーンを備えたスマホに合った「もっ」と使いやすい入力方式が採用できたはずと悔しがる。増井氏は詳しくは語らないが、iPhoneの開発途上では、フリック入力以外にいくつか候補があり、その中には増井氏が独自に考案したものもあった模様。アップルが、フリック入力以外の方式を採用してれば世界は変わっていた。携帯情報端末の新たな可能性を切り開く上で「最大のチャンスを逃したと思う」と増井氏は厳しい。そんな増井氏が最近、興味を持っているのはスマホ自体をユーザーインターフェイスの補助器具として使えないかというアイデアだ。スマホは各種のセンサーが内蔵され、ネット接続機能や大画面のタッチスクリーンを持つ。また、利用者を特定できる特性を生かせる。利用者の要望を先取りして、その場に合わせた情報を自動的に表示したり、リモコン代わりに使ったり、個人を認証して家やオフィスに入る鍵の代わりに使ったりする道具にもなりそうだと話す。

ユーザーインターフェイスの研究の一環として情報を視覚化して分かりやすくする研究にも取り組む。モットーである「実用的な技術の開発」の通り、今後も斬新で使いやすい技術が、増井氏の頭脳から生み出されるそうだと。(山田剛良)